
ソードアートオンライン 始まりの大地

角材さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアートオンライン 始まりの大地

【Nコード】

N1477Y

【作者名】

角材さん

【あらすじ】

初めての仮想世界にログインした少年「ソラ」

彼がログインしたのはネットゲームの間ではかなり有名になっていた「ソードアートオンライン」

魔法の要素を完全に廃止し、そのかわりに「ソードスキル」という名の必殺技を取り入れている。使える武器は近接武器だけ。つまり信じられるのは自分の剣技のみ。

そんな自分が英雄になれるような夢の世界を壊す出来事が起きた。

ソードアートオンラインを作ったプログラマー、茅場が言ったこと。

「この世界での死は現実世界での死。」

つまり、デスゲームの始まりだった。

少年は何を思い、何をするのか。

プロローグ 全ての始まり(前書き)

ども、角材さんです(。、。、。)

よく友達に「状況説明へタだなm9(*、、(プギヤー」と言われる角材さんですが頑張ってソードアートオンラインのSSを書いていきます！

本編ソードアートオンラインを読んでないと分かりにくいかもしれ
ません(、d、)

そこんとはすいませんm(——)m

それでは「プロローグ 全ての始まり」をどうぞ！

プロローグ 全ての始まり

「これはゲームであつても遊びではない。」

この言葉が千人の戦士たちを仮想の現実^{プレイヤー}に魂を閉じ込めた。

茅場のチュートリアルが終わり、俺は今まで手に持っていた曲刀を背中のホルダーに納め、人々が騒いでいる広場から少し離れた壁に背中を預け、覚悟を決めた。

「このゲーム内での死は、現実世界の死と同じ、か」

このゲームで生き抜く為にはレベルを上げるしかない。モンスターやアイテムなどはそのうちプレイヤー達の奪い合いを始めるだろう。それまでに出来る限りレベルを上げないと危ない。

βテスターでもないからソードアートオンラインのこともあまり知らない。

でもそれでも俺は、この世界に立ち向かい、抗い続けることを決めた。

まずやらなくてはいけないことは、死なない為にレベルを上げること。ただどレベルを上げるためにはモンスターがたくさん倒さなくてはいけない。そのためには今、持っている金で出来る限り強い装備を買うべきなのだろう。でも買うにもお金がまだあまり無い。

なら弱いモンスターを倒して少しずつ金を貯めるしかない。でも、恐らく「始まりの街」の周りのモンスターはもうすぐ狩りつくされるだろう。それなら多少危険度が増すが違う街へ移動したほうが良いはずだ。

「よしッ！！！！」

そう決めた俺は壁から立ち上がり、地図に見えるまだどこかに繋がっているかもわからない未開拓の地に向けて、歩き出した。

「絶対　生きて帰るんだ　」

空を見上げると一つの流れ星の流れた。

プロローグ 全ての始まり（後書き）

またまた角材さんです（o・d・）
短いですね、はい。

3個くらいにプロローグを分けるんで全部読んでくれたらうれしいです！

では（^o^）

ブログ 出会い(前書き)

どうも。角材さんです(*´、`)

連投する予定だったんですがちょっとリアルが忙しくてすぐに投稿できませんでした(´・ω・、)

一応、チマチマ更新していきますがこれともうひとつ、この小説に
少しか関係するソードアートオンライン系列の小説を投稿する予
定ですm(――)m

そちらは完全にソードアートオンラインを読んでないとわからない
ネタバレ全開な小説になっています(・・)

え、そんな暇があるなら早く更新しろって？

(。・ω・。)

そ、それではどうぞ(*・ω・)(ノ

プロローグ 出会い

最悪のデスゲームが始まって二週間が経った。人間というものは案外すごく、こんな恐ろしい状況にも適応を始めていた。そんなこと言ってる俺もこの状況を少しずつ受け入れ始めていた。

俺は第一層にある人があまりいない村の一つに留まり、ひたすらレベル上げに勤しんでいた。おそらく平均的なプレイヤーのレベルよりは高くなっていると思う。

いつものように近くの森に入り、ポップし続けるモンスターを狩り続けていた。モンスターがポップ出来る限界を越えて、モンスターが出なくなっただので一度、宿に戻ることにした。

森を抜け、草原を歩いているとき誰かの声が聞こえた気がした。

「ん？」

辺りを見渡す。辺りはポリゴンで出来ているとは思えないほどの草が風に吹かれているだけだった。

「気のせいかな？」

そして歩き出そうとした時、今度は確かに聞こえた。

「きゃああああー!!」

「!!」

その悲鳴が聞こえた瞬間、俺は走り出した。近くで誰かが危ない状況に合っている。こちら辺のモンスターは村にいる数人のプレイヤーで倒したからもういないはず。ということはこの状況を作ったのは、人間。

俺は宿の裏の茂みに駆け込んだ。すると俺が視認出来るギリギリの所にひとりの少女と一人の男性がいた。少女は木にもたれ掛かっている。どうにか声が聞こえた。

「な、なんでこんなことするんですか!？」

「このゲームから現実世界に帰れる保証なんてどこにもねえ!ならこの世界で満足するしかねえだろ!―それにこの世界で犯した罪はどうせ向こうではなんともないはずだしな!当たり前だろ?だってここは、『ゲームの中』なんだからなあ?」

そう言うと男は汚い笑いを浮かべながら少女に近づいた。そんな恐怖に耐えきれなかったのか、少女は涙を流しながら叫んだ。

「きゃあああああ!―!」

(間に合え!)

全速力で走った。男の薄汚い手が彼女に触れる直前、横から音がすることに気づいたようで男は俺のことを見た。

「あん? 誰だ、おま」

「黙れ、腐れ外道!」

俺はレベルをそこそこ上げ、ステータスアップポイントの約半分以上を『筋力』に注ぎ込まれた俺の全速力、全力の拳を見事なまでのクリーンヒットで顔面に受けた悪漢はそのまま吹っ飛び木に頭から当たった。

そして相手から気絶のアイコンが発生したことを確認し、少女の近くに駆け寄る。木に腰を掛けるようにして座っている茶髪のポニーテール?の少女は何が起きたか分からないようだった。一応、出来る限り優しい笑顔で少女の近くに屈んで、視線を合わせて話した。

「大丈夫かい?」

「え あ、はい」

少女は一度合った目を逸らし、不信感を抱いた眼差しで見えてきた。

「なんで 助けたんですか？」

「は？」

「もしかしたらあのままあの人にPKされたかもしれないじゃないですか！？」

PK？何のことだ？ネット用語かなんか？

「まあ、PKってのが何かは知らないけど 君、泣いてたじゃん。

」

「え？」

「泣いてる人をほつといて、逃げるほど最低な人間じゃないよ。」

」

彼女は俺の言ったことに驚いている、らしい。さらっとカッコつ
けたこと言ってしまったが、嘘を言っではない。だが恥ずかしい
ことを言ってしまったのは事実なので、彼女から顔を背けてしま
う。だが恐らく今の俺の顔は、ソードアートオンラインの高画質アバ
ターとして感情表現の表示の限界くらい顔を真っ赤にしているだろ
う。そんな顔を見られなくて顔を逸らしたのだが

「ハハ、ハハハハハ！！！」

「な！わ、笑うなよ！」

「ハハハハ！い、いや この世界来て、こんな人間味のある人に
あまり会わなかったんで 」

「 そうなの？」

「はい！このゲームは私たちの第二の現実であって、でも所詮ゲー
ムですから。 HPが無くなったら死んじゃうわけですし 」

」

そうか このゲームは俺達プレイヤーにとっては『第二の現実世界』であって、でもどこまで行っても『ゲーム』なんだ。しかもただのゲームじゃない、デスゲームだ。

精神的におかしくなって、人に危害を加える奴らだってこれからたくさん出てくるだろう。それならなおさら他人なんかに構ってられない、自分を守らなくちゃいけない。そう考えるなら俺のといった行動はおかしいだろう。

「とりあえず立てる？」

一応、手を差し出す。少女は差し出した俺の手をまじまじと見つめ、何故か顔を真っ赤にして俺の手をオズオズと握ってきた。それを引き、彼女を立ち上げさせる。

「あ、ありがとうございます。」

「いやいや」

二人してペコペコする。すると少女が思い出したように話し出した。

「あ、助けてもらったのに名前まだ言ってませんでした！私、ナギって言います。よ、よろしく願いしまふ！ / / /」

緊張していたのか最後の最後で噛んでしまい、ナギは顔を赤くしてうつむいてしまった。

「ハハハハ！俺の名前はソラ。すぐそこの村に留まってる。よろしくね。」

「は、はい！！よろしく願います、ソラさん！」

自己紹介を終え、ナギがとりあえず宿に移動しようと提案してき
たが俺は一つの事を思い出した。

「こいつどうする？」

俺が指を指したのは先ほどナギを襲った男だった。未だに気絶し
ていてピクリとも動かない。このまま犯罪者を送還する『牢獄』に
連れて行くつもりでいたのだが

「もういいですよ。結局、ソラさんのおかげで何もされませんでし
たし。」

「しょうがない。」

ソードアートオンラインでは気絶状態で攻撃を受けると気絶状態
を解除する事が出来るので、倒れている男のもとに行き、男の体を
蹴っ飛ばす。

「う、うう　ハッ！」

「よう、起きたか、犯罪者さんよ」

「ひ、ひい！」

「お前が襲った女の子がお前のことを見逃してくれるって言うてる。
だからさっさとどっか行け！もう変なことすんなよ？」

「ひ、ひいー！」

起きるや否や逃げていく男。その男をとりあえず見送りナギのほ
うへ戻る。

「よし、じゃあ宿行こうか。」

「はい！」

ブログ 出会い（後書き）

え？いつまでブログやってんだって？

つ、次でブログを終わりにしますのてゝ。んゝ！

許してくださいm(_____)m

ではゝ(^o^)

ブログ 別れと旅立ち

ソラさんと宿に移動して、NPCレストランでご飯を食べていた。私はパンとスープ、ソラさんはスパゲッティ。「みたいなもの」を食べていた。

「あ、おいしいですね!」

「だろ?ここに留まってるのはこの料理のおかげでもあるんだ。」

ソラさんはとっても美味しそうな顔でご飯を食べている。見ているこっちが幸せになれるような笑顔だ。私も自然と笑顔になれていた。

「ごちそうさまでした。」

「ごちそうさまー。いやーうまかった!満足満足♪」

「ご飯を食べ終わった私達はレストランでお茶を飲みながら、自分達の話をしていた。

「へー、ソラさんってソロプレイヤーだったんですか?」

「まあね、一緒にやってくれる友達もないしね。でもナギもソロだろ?」

「まあ、はい 周りが男の人ばかりで怖くて それに女の人はいなかなか見かけないですし。」

「まあ、そりゃそうだよな。」

こんなゲームにログインする物好きな女性のゲーマーはあまりいない。一応、何人かには会って名前は聞いたけど、多分あまり会っ

機会はない気がする。

するとソラさんが何かを思い出したように聞いてきた。

「あ、そういえばさ。さっき言ってたPKってのはなんなんだ？」

そういえばさっき、ソラさんはあまりオンラインゲームとかはやっていなくてネット用語とか全く知らない、と言っていたことを思い出す。

「ああ、それは、PK、すなわちプレイヤーを殺す行為のことです。

」

「プレイヤーを殺す？プレイヤーが？」

「はい。」

ソラさんは腕を組み、理解出来ない、と言った顔で言葉を繋げた。

「なんで？」

「いや 私に聞かれても」

それもそっか、と言ってさっき注文したコーヒー？的な何か（私は紅茶的なもの）を飲む。すべて飲み干して私達は黙りこくってしまっ。

（な、何か話題を探さないと）

私が話題を探していると。

「さて」

飲み干したカップをタップして消して、ソラさんは席から立ち上

がった。そして左手の人差し指と中指だけを立て、下に振り下ろす。すると鈴のような音が鳴って、システム画面が現れる。それを慣れた手付きで操作する。

「よし、回復アイテムも結晶もあるか。」

「え？また森に行くんですか？」

「ううん。言っただけだったけど、俺、この村から出て行くよ。」

「えっ！？」

驚きのあまり立ち上がって、ソラさんに駆け寄る。その姿に驚いたのかソラさんの顔が驚きに包まれる。

「な、なんですか！？」

「え、えーと　一昨日、ここに来たプレイヤーが、もう最前線が第二層の迷宮区まで行ってる、って言ってたから。一応、今のプレイヤーの平均的なレベルより高い自信があるからさ。第二層に拠点を移そうと思ってさ。」

「そ、そうですか。」

つまり、ここでソラさんとはお別れになってしまうということ。初めてこの世界で出来たお友達とお別れ。ソラさんから離れ、下を向く。

「じゃあ　俺、行くわ！またどこかで会えたら気軽に話し掛けてな。」

手を振り、ソラさんがレストランから出て行く。私は　ただただ立ち尽くしていた。

「さて、一回、始まりの街に戻らなきゃな」

ナギにお別れをして、モンスターの出なくなった森を歩く。
第二層ということはここにいるモンスターより強い。そんな簡単に死ぬことはないだろうが念には念を押した方がいい。自分の所持金を確認する。無駄にモンスターを狩ったおかげでたくさん金がある。

「しょうがない、新しい防具買うかな。」

暗くなるまでにはまだ時間があるのでゆっくり歩くことにする。
歩き始めてから十分くらいが経った頃、後ろの茂みから何かが走ってくる音が聞こえた。もうモンスターがポップする時間になったのか？

「っ！」

すぐに背中に刺しておいた曲刀を抜き、いつ攻撃が来ても大丈夫なように身構える。そしてそこに現れたのは

「ど、どうも」

「な、ナギ!？」

茂みから出てきたのは二十分近く前に別れた少女ナギだった。ずっと走ってきたのか息切れしていた。とりあえずそこら辺の木に腰掛けさせて、ナギの呼吸が整うのを待った。

「す、すみませんでした。もう大丈夫です。」
「ん、そっか。で　なんでナギがここにいるんだ？」

するとナギはばつが悪そうに下を向いてしまった。俺はナギが自ら話し出すのを待った。

「よ、良かったらなんですけど　」
「ん？」

ようやく話始めたと思ったら、声がかなり小さく耳を澄ませないと聞こえない程の音量だった。

「　　て　さい」
「え、なんて？」

声が小さくてあまり聞こえなかったので近づいた。するとナギは今まででは考えられなかったほどの声で言った。

「わ、私と！！！こ、コンピを　組んでください！！！！」
「　　は？」

このゲーム、いやこのゲーム以外のMMORPGでも基本的に『ハラスメント防止コード』というのがある。それは異性のプレイヤーが自分にやたらと近づいたり、無闇に触るという行為をされることを防ぐコードである。そのコードに該当したプレイヤーは処罰を

受ける。ソードアートオンラインでは、始まりの街の地下にある牢獄へ送還されるようになっていた。

そんなことがあったりするので女性プレイヤーと男性プレイヤーが一緒に行動するということはあまり見かけないのだ。

「
」

「え、あ、いや
」

ナギは俺の沈黙を否定と受け取ったらしい。本当はただ脳内回路がショートして言葉を話すことができないだけなのだが、少しずつ頭が理解を始めたので言葉がでるようになってきた。

「え、えと 俺、で、いいの？」

「は、はい！むしろお願いします！」

「でも、ナギって 男、怖いって
」

「なんでかわからないんですけど ソラさんは怖くないんです

むしろ、安心する？って感じがします
」

「そ、そか
」

木々の葉音や風の音でうるさかったはずの森が今ではやたらと静かだと感じた。俺たちは二人して黙りこくってしまう。

その沈黙を破ったのはナギだった。何かを思い出したかのように急に左手を振り下ろした。

「あ、あれれ？」

恐らくシステム画面を出そうとしているのだが、焦っていてちゃんと出ないようだ。

数回挑戦し、やっと成功してたどたどしい手付きで何かをいじっていた。

すると突然、俺の頭の中に鈴のような音が鳴った。これはシステムからメールが来た時になるもののはずだ。システム画面を開き、メール画面を確認すると一件だけ未読のメールがあった。それをタップし確認する。

『プレイヤー名 ナギさんからフレンド登録の希望が来ました。これを承認する場合は『YES』を。拒否する場合は『NO』を押してください。また拒否しても相手に伝えられません。』

YES

NO

『

メールはナギからのフレンド登録要請だった。恥ずかしがっていい話せない俺の為に送ってくれたのだろう。

そのメールを見て、俺は少し迷いながらも『YES』を押した。その瞬間、俺とナギの間に一つの画面が表示された。

『プレイヤー名 ソラさんが プレイヤー名 ナギさんのフレンド登録要請を承認しました。』

「 よ、よろしくな、ナギ。」

「 は、はい！ふ、ふつつか者ですが よ、よろしくお願い致しますふ！ 」

こうして二人のソロプレイヤーは晴れてコンビになった。

そして長い時間が経った。

あの全ての始まりの日から約二年。

一万人以上プレイヤー達は六千人にまで減っていた。

そして、最前線は現在、七四層まで到達していた。最終層までは後、二六層。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1477y/>

ソードアートオンライン 始まりの大地

2011年11月7日13時06分発行